

出発まで

7月20日、終業式の前日。母に、
「ホストファミリーの紙が来たよ。」
と言われて、

「どんな家族だろう。子供はいるかな。」

とドキドキしながら封を開けた。最初に目に入ってきた文字は Maria と Steffen。これはホストペアレンツの名前だ。子どもはないのかと思って続けを見ると、Alexander (M) age3 と書いてあった。3歳の男の子だ。3歳なんて絶対かわいだろうな、と思って楽しみになった。ホストファミリーはIT関係の仕事で、ホストマザーは奨学金コーディネーター。趣味がたくさん書いてあったが、Baking と書いてあるのを見て、何かお菓子を作ってくれるかな、一緒に作りたいな、と思った。

でも出発の日が近づいてくるにつれて、だんだん心配になってきた。2週間もホームステイできるだろうか、ホームシックになるのではないか、イギリス英語は聞き取れるだろうか、飛行機は落ちないだろうか。不安なことはたくさんあり、楽しみは消えて不安になった。学校の留学ではなく個人で留学に申し込んだ友達が次々と旅立っていき、自分の出発の日が近づいてくるのが怖かった。そんなある日、この体験記を書くときの参考にしようと思って、晁華のホームページで過去のメール賞受賞作品を読んでみた。すると、どの作品にもホストファミリーとの楽しそうな思い出が書いてあって、思わず読み入ってしまった。イギリスとカナダでは多少違うかもしれないが、書いてあった体験がとても楽しそうだった。そのため、イギリスに行くのがとても楽しみになった。それまでの不安が嘘のように消え去り、早く行きたくてたまらなくなった。その日は夜布団に入ってから、さっき読んだ体験記のことをずっと考

えていた。それから、わくわくしながら準備をして過ごした。

出発する朝は、今日イギリスに行くのだという実感はわかかなかった。母と妹が空港まで見送りに来てくれた。行く途中に品川駅で電車を待っているときに、ホームから流れてきた音楽に不意に泣きそうになった。聞いたことのないメロディーだったが、もの悲しく聞こえて、急に寂しくなった。電車に乗っているときも、何回か泣きそうになった。車内アナウンスで、

「次は羽田空港国際線ターミナル。」

と流れたときは「もう着いちゃったのか」と思った。集合場所には時間ぎりぎりに着いたので、すでに多くが集まっていた。母と妹と別れるとき、2週間も会えないのかと思うと寂しくなったが、その後友達と話しながら出国手続きの列に並んでいるうちに、寂しさは消えていった。飛行機の中では英語を使う機会はなかった。

イギリス到着

イギリスの税関では、最初に「Hello.」と言われて、日本でもイギリスでも同じようにまず挨拶をするのだと思った。語学研修説明会の時に税関で目的と期間を言うことを教えられたが、実際には聞かれず「Hello.」しか言わなかった。空港からホテルまではバスで移動した。窓から外を見て、最初はイギリスと日本はあまり変わらないと思ったが、英語の看板や洋風の家が見えてくると、「もう日本ではないところにいるのだなあ」と思った。ホテルと聞いて高い建物を想像していたが、4階建てだった。部屋に入ると洗面所のドアノブが外れていた。添乗員の方に言うと、その人の部屋と換えてくれた。ホテルのフロントには言わないのかと不思議に思った。イギリスでは壊れているのも当たり前なのかと思った。夕食はバイキング形式だったが、新しいお皿が汚れていた。日本ではきれいで壊れていないことが当たり前だと思っていたが、それはとても恵まれていることなのだと思った。部屋でホストファミリーへのお土産の折り紙の練習をして、改めて日本の文化の良さを実感した。時差ぼけ

でとても眠かったので、夕食から帰ってきてきてベッドに飛び込んでそのまま寝てしまった。

ホストファミリーとの対面

次の日はロンドン観光をしてからチェルトナムに移動した。イギリスの家は2軒以上がくつついた「長屋スタイル」で、どの家も外見が似ていた。ロンドンの中心部に行くと、「ヨーロッパだな」というような建物が建っていた。どの道にも5階建てくらいの建物が建ち並んでいて、道幅は狭い気がした。中心街でも、日本のような高層ビルはなかった。ロンドンでは街の景観を損なわないようにするために学校も伝統的な建物の中にあり、新しいビルなどを建ててはいけないと聞いた。そのような古い物を大切にすする姿勢が日本でももっと広まって欲しいと思う。イギリスに行く前からロンドンと言えばロンドンバスというイメージがあったが、ロンドンに行ってみてその理由がわかった。至る所にロンドンバスがいたからだ。バスはあちこちにおいて、3、4台続けて走っていることもあった。イギリスは半袖だとかなり寒いと聞いていたが、ロンドンは東京とあまり変わらないくらい暑さだった。

午前中はビッグベンやバッキンガム宮殿、衛兵交代式など有名な所を見た。英語の教科書で出てきた場所ばかりで、実際に見ることができてよかった。昼食は中華街のレストランで食べた。「ロンドンに中華街なんてあるの?」と思ったが、わりと大きい中華街があった。レストランの中のお客さんはみんな中国人だった。午後は大英博物館に行った。想像していたよりもずっと大きく、天井が高かった。博物館なので静かなところだと思っただが全く静かではなく、みんな話しながら見ている、私たちもガイドさんの説明を聞きながら見学した。ロゼッタストーンやミイラなどを見たが、どんどん進んでしまっただけで、もっとゆっくり見たかったと思った。

ロンドン観光を終えてチェルトナムへ向かうバスの中で、寝ていた私が目を覚ますと、窓の外にはさっきまでのロンドンとは全く違

う景色が広がっていた。道路の左右には牧場や草原が続いていた。チェルトナム市内に入ると、ロンドンとは違う町並みが見えてきた。ロンドンにあった5階建てくらいの建物はなく、1階建てか2階建ての店が並んでいた。バスが面会式会場の学校に着くのが少し遅れたので、まだ学校に着かないうちに面会式開始時間になった。これから一緒に暮らすホストファミリーがもう学校で待っていることが信じられなかった。学校は2階建ての建物できれいだった。中に入るとすぐにホールが見えた。緊張しながらホールに入ると、ホストファミリーがたくさん座っていた。自分の席に行きながら3歳の男の子を探すと、ユニオンジャックを振っている3歳くらいの男の子がお父さんとお母さんの間に座っているのを見つけた。お父さんはスーツを着ていてIT関係、という感じがとてもしたので、すぐに「このファミリーだ！」と、ぴんときた。とても優しそうな感じで、「この家族がいい！」と思った。私はダブルでのホームステイだったので、同じ家にホームステイする友達と面会式が始まるまで、「絶対あのファミリーだよね。」

と興奮して話していた。開会式が始まり、先生の紹介や生徒代表の言葉を待ちきれない思いで聞いていた。その間、何度もそのファミリーの方をちらちら見ていた。ついにホストファミリーとの対面となり、次々に友達の名前が呼ばれて、呼ばれた人はファミリーと写真を撮っていった。ほかのホストファミリーが呼ばれていくのを見ながら、「あのホストファミリーではなかったらどうしよう。でもほかに3歳の男の子はいなさそう」と思って緊張しながら自分の番を待っていた。席順に呼ばれていったのだが、私たちの前のペアが飛ばされて私たちの名前が呼ばれたので、まだ呼ばれないと思っていた私は驚いた。横を見るとそのファミリーが席を立とうとしていた。私は思わず友達と、

「やったあ！」

と言い合った。ホストペアレンツは笑顔で、

「Nice to meet you.」

と言ってくれた。とても温かく迎え入れてくれたので、

「あなたは私たちの家族だよ」

と言われている感じがして安心した。一人とも親切な人だなと思い、こんな家庭でこれから過ごしていけることをとてもうれしく思った。その後駐車場に行つて、車に乗った。車2台で来ていて、Mariaは買い物に行くと言つて私たちとは違う車に乗った。車に乗るときに、車に「HONDA」と書いてあるのに気がついたが、そのときは話しかけられなかった。学校から車で5分くらい行くと家に着いた。イギリスの家は2軒以上つながっていると聞いたが、その地区はみんな1軒ずつで、一つ一つが大きかった。外見が似ている家が並んでいて、とてもきれいな場所だった。私は一目でこの辺りを好きになった。家に着いて車から降りるとき、

「Is this Japanese car?」

と聞いてみた。これが初めて自分から話しかけた言葉だ。言う前は話しかけることに少し緊張したし、「こんなこと見ればわかるのに聞いていいのかな」と思ったが、Steffenが優しく、

「そうだよ。もう一台の車はトヨタだよ。」

というようなことを答えてくれたので、言つてよかつたと思つた。家に入るとSteffenが家の中を案内してくれた。広い家で、1階にはキッチンとダイニング、ソファーとテレビがあるリビング、Alexanderの遊ぶ部屋などがあつた。2階には私たちのベッドルーム、Alexanderのベッドルーム、ホストペアレンツのベッドルームがあつた。私たち用の部屋は2つあつたので、個室だつた。1階は土足、2階は裸足だつた。階段にはAlexanderのために安全柵があつた。広い芝生の庭もあつた。家の案内の間中、ずっとAlexanderが、

「Come to my room and play with me. Come to my room.」

と言つていた。人見知りせずに私たちを遊びに誘つてくれてうれしかった。リビングに置いてあつた世界地図でSteffenが、

「Where is Japan?」

と聞くと、Alexander が日本を指差してくれた。私たちのために練習してくれたのだと思うとうれしかった。夕食が出来るまで Alexander が絵本を読み聞かせてくれた。Alexander の英語はまだ発音がちゃんとしていなくて聞き取りにくく、私に分らない単語も多くて質問されて答えられないことが多く、困った。夕食は肉団子とポテトの料理にトーストだったが、味付けが薄かった。Alexander はこれから夕食だと言っても一緒に遊びたいと言って泣いていた。そんなに遊びたがってくれてうれしかった。習慣で「いただきます」を言おうとしたが、日本語で言っていないのかイギリスにも「いただきます」があるのか分からず、手を合わせてお辞儀をするだけにした。すると Maria が手を合わせてお辞儀を返してくれた。Alexander と Maria はもう夕食を食べたのか一緒に食べなくて、Steffen と私たちの3人だけで食べたので話はあまり出来なかった。優しいホストペアレンツで子供もいて、広くてきれいな家で個室の部屋ももらえて、こんな恵まれた家庭に来られた私は本当に幸せだと感じた。

始まったホームステイ生活

夕食の時に、朝食は自分で好きなきときに起きて勝手にコーンフレークを食べていいと言われた。冷蔵庫の中を見せられ、「ここに牛乳が入っているからね。」と言われたが、勝手に人の家の冷蔵庫を開けていいのかと戸惑った。「きつと私が朝ご飯を食べる頃にランチボックスを作ってくれているだろう」「それなら勝手に冷蔵庫を開けないですむ」と思ってその日は寝た。次の日の朝起きても1階に人の気配がしないので、ホストファミリーが起きてくるのを待っていた。しかし学校に行く時間が迫ってきてもいっこうに起きる気配がしないので、思い切って自分で冷蔵庫を開けて朝食を食べようと思って1階に降りていった。ランチボックスは間に合うのだろうか、と思いながらキッチンに行くと、テーブルの上にランチボックスが置いてあった。チャック袋

にポテトチップスとアルミホイルにくるまれた小さいお菓子、丸ごとリンゴが入っていて、「主食はポテチ?!」と驚いた。シリアルが箱が3つと、お皿とスプーンも置いてあった。お皿が用意してあったことで本当に勝手に食べていいのだと安心して朝食を食べた。行く直前になって、Mariaが冷蔵庫からサンドイッチを取り出してくれた。前の日に作ってあったようで、これから毎日自分で冷蔵庫からサンドイッチを出すように言われた。Steffenはもう仕事に行つたようだった。学校へ向かう車の中ではAlexanderがずっと一人でしゃべっていた。なかなか話しかけられなかったので、しゃべっていてくれてありがたかった。朝礼が始まるまでみんなでお互いのホストファミリーのことをしゃべり合った。皆が仲間に感じられた。私のクラスの先生の英語はイギリス英語で聞き取りにくかったが、ゆっくり話してくれた。学校からの帰りに保育園に寄つてAlexanderを迎えに行った後、スーパーマーケットに行った。スーパーは日本よりずっと広くて天井が高く、カートが違った。売っている物のサイズも大きかった。帰りの車の中で日曜日に行きたいか聞かれたので、その日バスから見た楽しそうな公園に行きたいことと街でショッピングをしたいことを言うと、

「OK!」

と笑いながら言った。その日私たちがたくさんお土産を買ったのに、まだ買うのかと思つたのだろう。

その後家に帰って夕食を食べた。この日は「いただきます」を言わないで食べ始めたが、何か変な感じがした。そこでホストファミリーに「いただきます」と「ごちそうさま」を教えた。MariaもSteffenもうまく言えないようだったが、紙にメモしてくれて、覚えようとしてくれたことがうれしかった。イギリスにはこの文化はなさそうだった。ほかに、趣味の話をした。MariaはBakingが好きで、

「What do you like to bake?」

と私が聞くと、ティラミスやチーズケーキと答えてくれた。今度一緒にチーズケーキを作ろうと言われた。Steffenはスポーツが好き

で、フットボールやバレーボール、ホッケー、スイミング、テニスなどたくさんスポーツをすと言っていた。そこからオリンピックの話になり、開会式は録画してくれると言った。Steffen はとても優しい。見たい競技は何かを聞いてくれ、それを全部録画してくれると言った。夕食はパスタだったが、これも味が薄かった。イギリス人は味付けが薄いかと思っていると、粉チーズを出してきて、「Alexander はまだ小さいから薄味にしているんだ。塩味が足りなかったらこれをかけてね。」

というようなことを言われて、薄味の理由が分かった。

夕食の後、庭で Alexander と一緒にフットボールと鬼ごっこをした。Alexander はフットボールが上手だった。その後は草を使って戦いごっこをした。Alexander がとても楽しそうにしていただけでうれしかった。

日本からのお土産を渡した。扇子と手ぬぐい、折り紙、寿司の消しゴム、富士山模様のペーパータオルをあげた。Maria は分解できる寿司の消しゴムを面白がっていた。Steffen は折り紙を見たことがあると言っていた。

この家ではお互いのことをとても大事にしていると感じた。

Steffen と Maria は Alexander のことをとても大事にしているし、Steffen と Maria もお互いを大事にしている。誰かが寝ているときはとても静かにしなければいけない。洗面所の電気は換気扇がうるさいのと静かなのがあって、朝と夜は静かな方にしなければいけないが、初めのうちは間違えてうるさい方にしてしまい、

「Very noisy.」

と注意された。部屋の電気をつけるときに「カチツ」という音が鳴るので、朝晩の静かなときは響いて困った。服が入っている袋から服を取り出すときにも袋の音がしてしまうので、衣類の準備は昼間や夕方にするようにした。階段の安全柵の鍵を開け閉めするのも大きい音がしてしまった。普段私の家では誰かが寝ているとも普通の声で話すし、私が寝ているときにテレビの音や話し声で起こされるこ

とはよくある。なので、この静かにすることにはホームステイが終わる頃になっても慣れず、神経を使った。

イギリスでは路上駐車をよく見かけ、違反ではないのかと不思議に思っていたところ、Mariaが道路に黄色い線が書かれているところではとめてはいけないうが黄色い線がないところでは駐車していると教えてくれて、日本とイギリスの交通ルールの違いを知った。日本では路上駐車はいけないと言うとMariaは驚いていた。

私の日常

お昼のサンドイッチは毎晩Steffenが作っているようだった。学校への送り迎えはMariaの時もあればSteffenの時もあった。学校からの帰りにスーパーマーケットによるが多かった。スーパーの中はとても寒かったが、イギリス人は皆半袖やノースリーブで全然寒そうにしていなかったので不思議だった。スーパーでは買い物しながら話しかけるようにした。ときどきカートを押す手が止まってしまうことがあったが、きちんと聞こうとしてくれていたことがうれしかった。そして家に帰ってくると夕食までAlexanderと一緒に遊んだ。道路にチョークで絵を描いたりフットボールをしたりすることが多かった。Alexanderは競争が好きなのか、走って競争したりバイクのおもちゃで競争したりもした。バイクのおもちゃ2台と自転車1台を使って私と友達とAlexanderの3人で競争したのだが、バイクや自転車は私たちにはとても小さくて乗れなかった。しかしAlexanderはそんなことおかまいなしだったので、しようがなく私は自転車を押して競争した。Alexanderは何かあるとすぐ機嫌が悪くなってしまうので、競争に負けそうになるとすねてしまった。しかしすぐに機嫌がよくなるので助かった。何が原因で機嫌が悪くなったのか分からないこともあった。Alexanderの英語が聞き取れてうまく答えられてコミュニケーションができたときはうれしかったが、単語が分からず何と聞かれたか分からないときは、

「Yes.」

と言ってごまかしてしまった。

夕食後に家族全員で近くを散歩しに行った日もあった。家の辺り一帯はとてもきれいで、小さな湖もあった。歩きながら家族の話などをしたり「だるまさんが転んだ」をしたりした。日本にもイギリスにも同じ遊びがあるのだな、と思った。だんだん英語で話しかけることに慣れてきたと感じた。ホストファミリーのイギリス英語を聞き取れるか心配だったが、全く大丈夫だった。食事の時に私が話しかけようとする *Maria* も *Steffen* も笑顔で聞いてくれて、とてもうれしかった。文法が変でもちゃんと答えてくれた。そのおかげで安心して話すことができた。

ホームステイが始まって数日たつとイギリスの生活に慣れ、この生活が当たり前のように感じた。車で学校に行く、お風呂はシャワーだけ、と言うことにも慣れ、このままここで暮らしてもいいと思うくらいになった。日本を出発する前はホームシックにならないかと心配だったが、なりそうになかった。それくらいホームステイ生活は楽しく充実していた。

伝えた意志

朝食はコーンフレークのみで昼も夜もほとんど野菜が食べられない生活が何日も続いて、私も友達も野菜が食わなくなってきた。私は果物が好きで日本では毎晩食べているので、果物も食わなくなってきた。学校ではほかの友達も野菜が食べたいと言っていた。イギリスの朝食はトーストとスクランブルエッグ、ベーコンなどのイングリッシュブレックファーストだと思っていたので、コーンフレークだけではなくほかのものも食わなくなった。そこで、ホームステイ3日目の夜に思い切って *Maria* に朝食にサラダを食べたいと言ってみた。すると、

「朝からサラダを食べるの?! コーンフレークを食べるのが嫌なの?」

と驚かれたので、

「コーンフレークとサラダの両方を食べる。」

と言うと、

「朝からそんなに食べるの？」

とまた驚かれた。イギリス人は朝からボリュームのあるイングリッシュブレックファーストを食べると思っていたので、そこまで驚かれるとは思っていなかった。

「いいけど、私は朝用意できないから自分たちで用意してね。」

と冷蔵庫の野菜が入っている所を見せられた。野菜は少ししか入っていないくて、日本のように冷蔵庫に野菜室はなかった。勇気を出して自分の意志を伝えたのにとっても驚かれたので、言わない方がよかったかと思った。果物も食べたいとはとても言い出せなかった。

その後 Alexander と遊んでいると、Maria に、

「Girls!」

と呼ばれた。キッチンに行ってみると、サラダができていて、

「今作ったから冷蔵庫に入れておくね。」

と言われ、Maria の優しさに感動した。それから毎日夜に用意して冷蔵庫に入れておいてくれるようになった。休日にサラダが用意されていなかったことがあったが、食べ終わってしばらくした頃に、

「昨日サラダを作るのを忘れちゃったから今から食べる？」

と聞いてくれて、私のことをきちんと考えてくれて希望通りにしようとしてくれたことがとてもうれしかった。

縮まっていく距離

ホームステイ4日目はとてもいい天気だった。学校では校庭で授業をした。学校の帰りに、

「今日はピザよ。」

と言われ、スーパーマーケットでピザやアイスクリームを買った。学校で何人もの友達がピザを食べたと言っていたので、私も食べたかと思っていた。天気がいいので夕食は庭にテーブルを出して外で食べた。前の日にサラダが食べたいと言ったのでこの日は夕食にポ

テトサラダを作ってくれた。ピザはもちもちでとても美味しかった。デザートにはアイスクリームをビスケットで挟んで食べた。アイスクリームは今までに食べたことがないくらいふわふわしていて美味しかった。

食後、みんなで家族写真やジャンプしている写真を撮った。段ボール箱をおいてカメラの三脚にし、タイマーで家族全員入った写真を撮り、それを最終日のさよならパーティーのフォトコンテストに出す写真にした。面会式の時に Alexander が振っていたユニオンジャックを私と友達が持ち、Alexander がユニオンジャックの描かれたTシャツを着ていたので、ユニオンジャックが三つある写真になった。イギリスらしくていいと思った。その写真はフォトコンテストの最終選考まで残ることができた。その後は空中で飛んでいる写真を撮った。みんなで写真を撮ることで距離が縮まった気がした。寝る前に部屋の窓から外を見ると、隣の家の人も庭で食事をしているようだった。空には星がたくさん見えた。今日はイギリスに来てから一番楽しい日だったな、と思いながら寝た。

ホストファミリーと過ごした休日

8時くらいに起きていつものように朝食を食べた。休日是一緒に食べるかもしれないと思って何時に起きればよいか聞くと、何時でも好きなときに起きて朝食を食べていいと言われた。11時半くらいにショッピングモールに出かけた。チェルトナムの街にはショッピングにいいお店がたくさんあった。ショッピングの後には公園に行ってピクニックをした。サンドイッチやバナナ、スナックなどを芝生の上で食べた。日本ではみんなレジャーシートを敷いているが、イギリスではみんなブランケットを敷いていた。公園には滑り台やブランコ、ターザンロープなど遊具があり、鶏もいた。泥や水で遊べる場所があつて、全身裸になっている子供がけっこういて驚いた。日本ではいないと思った。ターザンロープの順番を待っていたとき、同じ年くらいの女の子二人が私と友達の方を見て笑っていた。

何歳かと聞かれ、

「Fifteen.」

と答えると、女の子たちは、

「Fifty?」

と言って笑っていて、嫌な気分になった。その後は、

「ボンジュール。コンニチハ。」

と言われて、外国人だと馬鹿にされて少しショックだった。私はターザンロープで遊びたかったが、もうそれ以上何か言われなくなつたのでほかの遊具のところに行つた。このことはホストファミリーには言えず、楽しかったか聞かれ、楽しかったと答えた。実際、それ以外のことは楽しかった。公園で1時間も遊ばないうちにそろそろ帰ろうと言われ、家に帰つた。

自分の部屋に荷物を置きに行つて、しばらくして遊ぼうと思つてリビングに行くと、Steffen や Alexander が裸になつて、Maria がバリカンで髪を切っていた。裸だったのでどうしてよいか分からず、キッチンにあるソファアに座つて髪の毛を切り終わるのを待つていた。切り終わったかと思うと、

「車を洗うから見たければ見ていいよ。」

と言われたので洗車を見に行つたが、見るだけではつまらなくなつた。一緒にやりたかったが、

「庭に座つてもいいし近くを散歩してもいいよ。」

と言われ、できなさそうだったので散歩に行つた。本当の家族3人と区別されたことと放つておかれていることが悲しかった。家族の一員として扱つてほしいと思ひながら、自由にさせてくれるのはありがたいことなのかもしれないと思つた。起きる時間も朝食を食べるのも空き時間の過ごし方も任されている自由放任主義がこの家のスタイルならそれもそれでいいと思ひ直して、前向きに考えるようにした。

散歩から家に帰ると、

「洗車が終わったらチーズケーキを作ろう。」

と言われた。レアチーズケーキで、最初にビスケットを砕いて生地を作った。その上にスライスしたバナナをのせ、チーズクリームをのせた。砂糖を目分量で入れていたのでお菓子作りに慣れているのだと思った。チーズケーキは一晚置いて、次の日に食べた。砕いたビスケットと混ぜたバターがマッチして美味しかった。バナナを入れるときは「え、バナナを入れるの？」と思ったが、食べてみるとバナナがおいしさを引き立てていて、入れた方がいいと思った。

前の日もその前の日も折り紙をやるうと言ってできなかったが、この日も時間がなくてできなかった。

アクティビティー

学校は午前中が授業で、午後はバスで観光やアクティビティーに行った。オックスフォードやバイブリー、バートンオンザウオーター、ハリーポッターのロケ地の Gloucester Cathedral などいろいろなどところに行った。スコーンを作ったり乗馬をしたりもした。

乗馬は最初のほうは少し揺れただけで落ちるのではないかと思つてとても怖かったがいつの間にか慣れて、走れるようになっていた。どの馬もうれしくなさそうな顔をしていて、人を乗せるのが嫌なのではないかと思つた。乗馬は母にせっかくだからやってみた方がいいと言われて申し込んだ。乗った直後は怖くてやらなければよかつたと思つたが、終わったときにはやってよかつたと思えた。

スコーンは、2階建てバスに乗って別の学校に行つて作つた。2階はとても揺れて、乗り心地は1階の方がよかつた。下り坂はジェットコースターのように感じられて楽しかつた。スコーンはうまくできて美味しかったので、家でまた作りたいと思う。

文化の交流

ホストファミリーへのお土産の折り紙と一緒に鶴と紙風船を作つた。折り紙をやつたことがない Steffen と Maria には難しいかと思つたが、二人とも器用できれいに折れた。何日も折り紙をやるうと

言ってできなかったもので、この日 Steffen が、

「今日は食後に折り紙をやろう。」

と言ってくれて、覚えていてくれたこと、気にしてくれたこと、日本の文化を知ろうとしてくれたことがうれしかった。

ホストファミリーに日本食を作ってあげたいと思って、お好み焼きの材料を持って行った。どれくらい時間がかかるか聞かれ30分くらいと答えたが、実際は1時間以上かかってしまった。ボウルがなくてお鍋でやったり、フライ返しがないのでスプーンと割り箸でひっくり返したりして、大変だった。作るのに時間がかかってしまっただけで待ってくれているホストファミリーに申し訳ないと思っていると、Steffen が笑顔で見に来てくれて安心した。少し焦げてしまった部分もあったが、美味しいと言ってくれた。焦げてしまったと言うと、全然気にならないと言ってくれてうれしかった。日本から持って行ったせんべいを出すとみんな気に入ってくれた。Alexander は、

「I love it!」

と言って喜んでくれた。次の日に Maria に、

「Your cooking is very delicious.」

と私が言ったときに、

「昨日のあなたの料理も美味しかったよ。」

と言われた。私も食べたが、今まで食べたことがないくらい美味しいお好み焼きだった。

Maria は着物が好きだと言ったので、私がさよならパーティーのために日本から持って行った浴衣を着付けてあげた。私は出発の二日前に叔母に着付けを教えてもらったばかりだったのでうまく着付けられるか少し心配だったが、きちんと着付けられた。Maria にとっても似合っていて、すごく喜んでくれたので着付けてあげてよかったと思った。Maria は外国の文化を学ぶことが好きだと言ってくれた。着物の文化はどうやってできたのかと聞かれたが、分からなくて答えられなかった自分が日本人として情けなかった。電子辞書で

英語版の着物の説明を探して見せた。着付けだけして歴史を知らなかったことが恥ずかしかった。

ホストファミリーと過ごす最後の日

最後の日は休日で、チェルトナムにある PRIMARK に行きたいと言うと、グロスターにある PRIMARK の方が大きいからグロスターに行こうと言われた。私たちがより楽しめるように考えてくれたことにホストファミリーの優しさを感じた。グロスターにはチェルトナムより大きなショッピングモールがあった。ホストファミリーと一緒に行動しないで自由にお店を見ていいと言われたので、友だちと二人でお店を見て、2時間後に待ち合わせた。楽しかったが買いたいと思った物はなく、このまま家に帰って1日が終わってしまったのかと思うともっと充実した最終日にしたかったな、と少し残念に思った。

家に帰ってきたときに、親戚に送ろうと思っていた絵葉書と切手を買いはじめたことに気づいた。この数日前に切手が欲しいと言ったところ、

「平日は買いに行けないから土曜日に買いに行こう。」

と言われていた。絵葉書が買えないでいたのでこの日グロスターで買おうと思っていたが、忘れてしまった。次の日は帰る日なので今日しかないと思ってホストファミリーに相談すると、郵便局が開いているか確認しに連れて行ってくれた。わざわざ連れて行って、私は迷惑をかけてしまった申し訳なさでいっぱいだった。郵便局は午後1時までで、そのときは午後3時半くらいだった。Mariaは郵便局が閉まっていたことに対して、

「I am sorry.」

と謝ってくれて、連れてきてくれたことに対して私がお礼を言うと、

「全然大丈夫、気にしないで。」

というようなことを言ってくれ、Mariaの優しさが身にしみた。

家に帰ると、

「私たちは隣の家のパーティーに少しだけ行ってくるから二人で待っていてね。」

と言われた。その日の朝、部屋の窓から隣の家に入人がたくさんいるのが見えたので、パーティーなのかな、と思っていた。3人が出かけてからしばらくして Maria が帰ってきた、

「あなたたちも一緒にパーティーに行こう。」

と言われた。結婚記念日を祝うパーティーらしかった。イギリスでは近所の人を招いて庭でパーティーをすることがよくあるそう。

私は近所の人とパーティーをすることはないので楽しそうに羨ましいと思った。

パーティーにはたくさんの方が来ていて、いろいろな人と話した。大学で日本語を学んでいるという人もいた。日本語の簡単な挨拶を知っている人が何人かいたのでうれしくなった。何人かに、

「何かお酒を飲む？」

と聞かれ、そのたびに周りの大人が

「この子たちは15歳だよ。」

と言ってくれ、驚かれた。イギリスでは18歳からお酒が飲めるらしいが、もうすぐ私はそんな年になるのかと思った。

会場には犬が2匹いた。いつもの私だったら見ているだけか少し触るだけだが、この日は思い切ったたくさんでみると、犬がかわいくなってきた。その後はボールで遊んだ。ボールを取ってきた犬に、

「Hand.」

と言って手を出すと手の上にボールを置いてくれると教えられてやってみた。最初よだれのついたボールが手の上にのせられたときは「うえっ」と思ったが、我慢して何回かやり続けているとそんなことは気にならなくなった。だんだん犬がなついてくるようで楽しくなった。思い切ったやってみてよかったと思った。最初は怖かった乗馬も、チャレンジしてみてもよかったと思った。母にイギリスに行く前に、

「何でも挑戦してみなさい。」

と言われたが、イギリスでいろいろなことに挑戦して、挑戦する楽しさを知った。これからも怖がらずに挑戦していくようにしたいと思う。

このパーティーでたくさんの人と話すことができ、とても楽しく充実した1日を過ごすことができた。最終日らしい楽しい日だった。家に帰って部屋の窓から隣の家の庭を見ると、パーティーに来ている人たちが私に気づいてみんな手を振ってくれた。パーティーに行く前はただ見ているだけだったのに、帰ってきた後では「あの人と話したな」「あの犬がいる」と思いながら見ていて、何だか不思議な感じがした。

部屋で荷物を詰めていると、MariaとSteffenとAlexanderがユニオンジャックのマグカップを持ってきてくれた。お別れのプレゼントだった。私もお礼のカードを渡した。楽しかった思い出、たくさん感謝。書きたいことがたくさんあって、何から書けばよいか分からないくらいだった。ホストファミリーとの大事な思い出の一つである折り紙で作った鶴をカードに貼った。カードを渡すとMariaとSteffenが抱きしめてくれた。Alexanderが大事にしている買ったばかりのおもちゃをくれたときは涙が出そうなくらい嬉しかった。でも、いつもAlexanderが自分の子供のように大切にしているおもちゃがなくなって後で泣いてしまわないかと思つてSteffenは、

「これもらって大丈夫？」

と聞くと、

「うん、たぶんよくないかな。」

ということを言っていたので、そつと返しておいた。その後はみんなだ紅茶を飲んだ。この家に来てから初めて飲んだ紅茶だった。日本に帰りたくない、もっとこの家で過ごしたいと思つた。

最初に見たAlexanderはユニオンジャックを振っていて、最後にはユニオンジャックのマグカップをくれた。ユニオンジャックで始

まってユニオンジャケットで終わった私のホームステイ生活。やっばりイギリスらしいな、と思った。

出発の日

朝起きて制服に着替え、荷物を完全に詰めても今から帰るとは思えなかった。いつものように学校に行つて、またこの家に帰つてくるような気がして、家を出るときもこれが最後のお別れだとは考えられなかった。MariaとAlexanderとは家の前で別れて、Steffenが学校まで送ってくれた。玄関でさようならを言つて車に乗ろうとしていると、Mariaがチョコレートトムースを持ってきてくれた。ホームステイ中に何度も食べて気に入ったもので、旅の途中に食べられるように渡してくれた。最後の最後までMariaの優しさに包まれていた。このホームステイ生活は本当に優しさに溢れたものだったと思つた。今までの感謝を伝えたかつたが感謝していることがたくさんありすぎて言葉が見つからず、ただ、

「Thank you very much.」

としか言えなかった。

チェルトナムを出発してロンドン観光をしてから空港に行った。ロンドンのコベントガーデンでショッピングをしているときに、近くにいた女性に鞆を開けられた。スリが多いと聞いていたが、リュックサックではなくショルダーバッグなら大丈夫だと油断していた。一瞬何が起こつたか理解できなくて、次の瞬間に鞆を開けられたと分かる体が熱くなった。幸い何も取られなかったが、パスポートやお金を入れていた鞆だった。ロンドンが怖くなって安全な日本に帰りたいと思つた。安心して買い物できる日本は本当にいい国だと思つた。

語学研修を振り返つて

この語学研修ではとてもたくさんのことを学んだ。毎日が充実していて、家でだらだらと過ごす普段の夏休みの2週間とは比べもの

にならないと思った。

最初はなかなか自分からホストファミリーに英語で話しかけられなかったが、2週間の間には夕食時に自分から話し出すことが出来るようになったりスーパーで買い物しながら話しかけられるようになったりした。そしてホームステイ2週目にはいつのまにか一人の時でも英語で考えるようになっていた。

成長したこともあったが、私の英語はまだまだ駄目だということもよく分かった。過去形が分からなくて困ったり、単語が分からなくてなんと言えばいいか分からなかったり、頭の中では文ができていても言おうとすると文法がぐちゃぐちゃになってしまったりした。発音やアクセントが少し違うだけで通じないことも多かった。

これからもっとしつかり英語を学んで、いつかまたホストファミリーを訪ねたい。そのときには電子辞書なしで会話できるようにりたいと思う。

語学以外にもたくさんのことを学んだ。イギリスで生活することでイギリスの文化を学ぶことができた。そして日本の良さ、日本の文化の良さを再認識することもできた。この日本の良さを保つていかなければいけないと思う。

語学研修に参加して本当によかった。参加させてくれた両親に感謝したいと思う。